少子時代と小児科

日本小児科医会会長　内藤壽七郎

ひところに比べて三分の一に減少した出生率に符合したかのように，小児科外来診療数も激減している。

はなはだ不謹慎な譬で恐縮ながら，以前には二年あるいは三年おきにあった全国的麻疹の大流行は，平素寡収入の小児科医にとって，サラリーマンの臨時ボーナス的なもので一息つくこともあったが，今はそんなものはない。なぜなら，自らの首を締めることと知りながら，小児科医は予防接種に積極的な協力を惜しまなかったからである。

現在の出来高払いの保険診療報酬を踏襲する限り，診療収入の回復を図ることは至難なことと言わねばならない。

現在こそ真の医の心を持った優秀な小児科医は少なくない。現に6,000人近くの日本小児科医会の会員数がその証と言えよう。しかし，上に述べた診療収入状態から脱脚し得ないとしたらどうであろう。われわれの後継者として若い人々がついてきてくれるであろうか。現にもはや新入局者皆無の医局もある。

現代っこの一般として，同じ時間働いても他科の三分の一の収入，それも先細りとあっては小児科医を志す若者は二の足どころか三の足であろう。

何か若者に魅力のある，しかも社会貢献ともなるような新しいことが必要になっているのではあるまいか。座して手を拱いて待つ姿勢を保持する限り何も生まれてこないと思う。

小児科診療というものの内容には，発育・発達を絶えず見守っていると言う表面切ってはなかなか評価され難い心遣いが働いている。これを表面に現して評価させる方法があるのではないか。

ネルソンの第14版の第１ページ最初の行に，ベールマンは述べている。小児科医は，成人に達するまでに乳幼児・学童・青年期を通じて，その身体発育，心の発達について，to achieve full potential as adultと言うことを書いている。

現時点で見る限り，子供が両親から与えられた素質を成人の時点で完全に発育・発達させたといえるであろうか。よく言われる人間の脳細胞は20歳以後は１日20万個消えてゆくと。出生時，仮に140億あった脳神経細胞を，われわれはその子が成人するまでに，疾病によるものでなく，自然環境，社会環境等のほか家庭環境において誤った教育，しつけ等により相当不活化，あるいは消滅させていることはないであろうか。常にその個々の乳幼児について見守り，もし歪みかけていれば早く矯正することが極めて重要になろう。

戸外に出て働いて収入を得ることを第一義とし，子育ては第二義あるいはほとんど人まかせにしている母親も少なくない現在，発育・発達に好ましくない徴候が現れていても気付かないでいるとき，それを早期発見して歪んで発達するのを未然に防ぐことは国家社会の未来にとって極めて重要であり，個々の子供にとっては大きな幸せを与えることになるであろう。

このことは日常診療の中でも不可能ではないが，それは診療室で病児と健康児を同居させることにもなるし，アドバイスには時間がかかる。

別に日時を定め，時間をかけて十分話し合い，正しい育て方の処方箋を示すことが必要になろう。そのことに対する評価は当事者と行政の合議により一定の枠を定めてみるのも一案であろうし，とにかく疾病診療保険と別に考える必要があろう。

要は，疾病と同じく早期に歪みを正すことによって，その子の生涯の幸せを与えることこそ医の道を学ぶ若者にとって魅力ある一つの新しい有意義な小児診療ではあるまいか。